

人々の主観的な安心感に関する実証分析

—地域社会の経済的状況とソーシャル・キャピタルの役割を中心に—

An Empirical Analysis of People's Sense of Security in life
-Focusing on the Role of the Economic Status of the Community and Social Capital-

林 万平* 塩谷 尚正** 広沢 俊宗* 陳 那森*
Mampeï HAYASHI Takamasa SHIOTANI Toshimune HIROSAWA Nasen CHEN

Abstract

Insecurity in social life is increasing among people. It has been believed that such people's subjective well-being can be secured by ensuring social safety. However, recent researches have come to argue that there are different mechanisms between ensuring social safety and people's sense of security. There is a growing need for empirical research on the social factors that determine people's sense of security.

In recent years, there has been a development in research on people's subjective well-being in life. In the study, the scores of people's subjective well-being, which is self-reported in various surveys, are estimated by using economic and social factors in order to identify policy measures that affect people's subjective well-being in life. A series of empirical studies on happiness and life satisfaction in economics, sociology, and psychology have focused on factors such as the economic status of society, social capital, and people's sense of control. However, there are few studies that explicitly treated people's sense of security in life as a kind of subjective well-being and analyzed it with the same approach.

In this paper, we analyze the relationship between people's sense of security in life and social-economic factors by using the micro data collected through a questionnaire survey. This analysis focuses on the people's sense of security in local life. Because we assumed that the people's subjective well-being in life is nurtured by their daily lives and the community environment. The purpose of this paper is to analyze whether the sense of security in local life is defined by factors such as (1) the economic status of the community and (2) social capital, and (3) the sense of control that expresses individual psychological characteristics.

The results show that enhancing the sense of control, accumulating bridging and network-type social capital and reducing unemployment rate of the communities contribute to ensure people's sense of security in local life. Furthermore, raising the level of education is also found to be effective.

キーワード：安心感, 安全安心な社会, ソーシャル・キャピタル, コントロール感, 地域経済

* 関西国際大学経営学部 ** 梅花女子大学心理こども学部

I. はじめに

人々の間で社会生活における不安の高まりが見られるようになってきている。内閣府「国民生活に関する世論調査」は1981年から現在に至るまで、その調査の中で「あなたは、日頃の生活の中で、悩みや不安を感じていますか、それとも、悩みや不安を感じていませんか。」という質問を行っている。この調査結果を時系列で観察してみると、1990年以降、「悩みや不安を感じている」という人の割合は増加に転じており、ここ最近では「悩みや不安を感じていない」と回答する人の割合よりも高い水準で推移してきていることが確認できる(図1)。不安を感じる対象は調査年によって変動があるものの、趨勢としては生活に漠然とした不安を感じる人の割合は増加しており、人々の社会生活における不安の高まりが一過性のものではないことが分かる。

これまで社会生活における人々の不安は、個人の精神的な態度の問題とみなされるか、社会の安全を確保すれば自ずと解消される問題であると考えられてきた。人々が社会生活において晒されている不景気や雇用の不安、健康や老後の問題、自殺、社会保障制度や財政の安定性、学校教育や育児、環境問題、食品の安全、放射性物質の拡散、地方の衰退、政治や行政の汚職や腐敗、大規模な事故や自然災害、感染症、犯罪やテロ行為等といった様々なリスクに対して、安全な環境を実現することができれば即ち人々の安心が確保されるということは自明のこととされてきた。結果的に、ひょうご震災記念21世紀研究機構(2009)が指摘するように、社会生活において様々な問題が起きる度に、まるで「もぐら叩き」のように、事後的、対症療法的な問題解決が志向されてきた。

しかし、近年、安全安心社会の研究において新しい展開が見られるようになってきている。高坂他(2010)は、安全安心な社会の構築のためには、様々な社会問題の個別的解決とは別のアプローチが必要であることを主張し、社会的信頼の観点から人々の主観的な安心感の規定要因について実証分析を行っている。中谷内(2006・2008)も、社会の様々なリスクから客観的に見て安全であれば人々が直ちに安心感を得るというわけではなく、安心の確保の上で社会的信頼が重要であるとしている^{注1}。こうした研究では、瀧本・城(2016)やひょうご震災記念21世紀研究機構(2008)が指摘するように、社会の安全と人々の安心の確保には異なるメカニズムが存在すると考える^{注2}。さらに、ひょうご震災記念21世紀研究機構(2009)は、「安全安心な社会」とは単に社会の危険や不安が少ないだけでなく、人々の主観的なウェルビーイングが高い社会であると定義している^{注3}。こうした研究から、様々な危険や社会不安の削減の先に人々の安心の高まりを見出すのではなく、人々の安心感を規定する社会的要因を発見することで、安全安心な社会の実現に向けた政策対応のあり方を明らかにしようとする研究が見られるようになってきている。

こうした安全安心社会の研究における分析アプローチは、近年、盛んに行われるようになってきた幸福度に関する実証研究の方法に近い。これまで幸福研究については、心理学の分野におけるコントロール感と主観的ウェルビーイングに関する分析を始めとして(Lachman and Weaver, 1998)、多くの研究が行われてきた^{注4}。だが近年、経済学分野において先駆的な研究である Frey and Stutzer(2002)以降、人々の幸福感や生活満足度といった主観的ウェルビーイングと経済・社会的要因に関する実証研究の蓄積が進んできている。一連の研究では、それまで客観的な分析には馴染まないと言われてきた人々の主観的な幸福感や生活満足度といったウェルビーイングの概念の中身に立ち入ることなく、アンケート調査を基に人々の主観的ウェルビーイングの状態を把握し、経済・社会的要因との関連性について実証分析を行っている(Clark, 2006; Clark and Oswald, 1994; Pedersen and Schmidt, 2011; Winkelmann and Winkelmann, 1998)。特に、近年ではソーシャル・キャピタル(社会関係資本)に着目した分析が見られるようになってきている(Bjørnskov, 2006; Helliwell, 2003; 2004; Helliwell and Putnam, 2004; Hudson, 2006; Kuroki, 2011; 大崎, 2017)。ただ、これらの研究では幸福感や生活満足度について分析を行っているものの、人々の主観的な安心感については明示的に取り上げてこなかった。

そこで本研究では、アンケート調査により人々の主観的な安心感について調査した上で、経済・社会的要因との関連性について実証分析を行う。その際、本分析では地域社会における暮らしの安心感を分析対象とする。人々が社会生活において感じる安心感は、日々の生活とそれを支える地域社会の環境において醸成されると考えたからである。人々が居住する地域において感じている暮らしの安心感が、(1)個人の心理的特性を表すコントロール感を考慮した上で、(2)地域の経済的状況や、(3)ソーシャル・キャピタルといった要因に規定されているか分析することが本稿の目的である。

本稿の構成は以下の通りである。次章では主観的ウェルビーイングを巡る先行研究を紹介する。第3章では、本分析で使用する個票データについて、調査票を基に説明する。また、地域社会の経済的状況を表すマクロ統計についても概観する。第4章では推定モデルと分析結果を示し、第5章で結論を述べる。

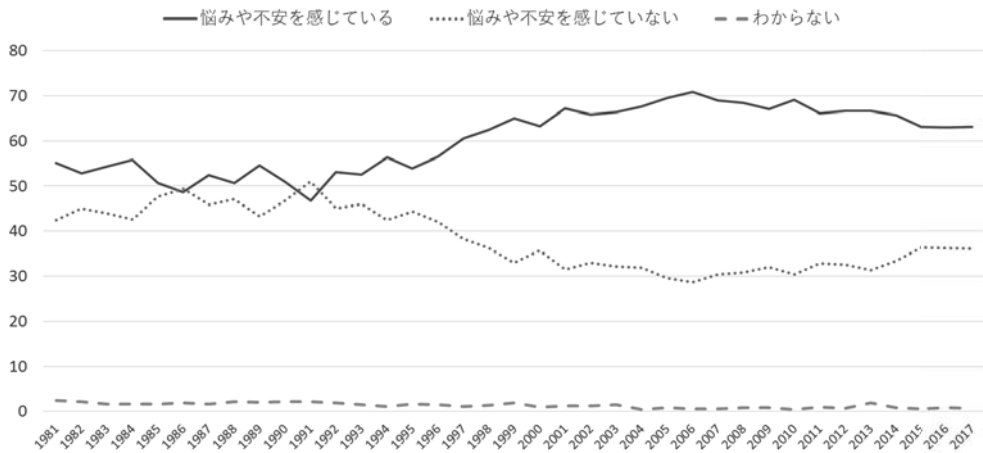


図1 生活に悩みや不安を感じる人の割合に関する時系列推移

データ出典：内閣府「国民生活に関する世論調査」

II. 先行研究

近年、経済学において幸福度に関する実証研究が進むようになったきっかけは Frey and Stutzer(2002)に遡る。それまで経済学の分野では、幸福度や生活満足度といった指標は客観的に観察可能でないことから、科学的な分析に適さないと考えられてきた。しかし、Frey and Stutzer は、観察可能な個人の行動は主観的なウェルビーイングの不十分な代理変数であるとした上で、General Social Surveys や World Value Survey といった国際的なアンケート調査において自己申告された幸福度や生活満足度のスコアを用いることで、その背景にある経済的要因について分析できると主張している。心理学の分野における様々な研究の結果、幸福度や生活満足度といった主観的ウェルビーイングのスコアが実証分析において有効な変数であると確認されていることを紹介した上で、幸福度関数を推定することでその決定要因について分析している。分析の結果、主観的なウェルビーイングである幸福度は、年齢や性別、健康状態、結婚の有無といった個人の属性だけでなく、雇用やインフレーションのような経済・社会的要因や、さらには国民の政治参加の状況といった政治の意思決定過程にも影響されることを明らかにしている。

こうした研究がきっかけとなり、人々の主観的なウェルビーイングに影響を与える経済・社会的要因に関する実証分析が行われるようになってきた。特に、これまで失業に注目した分析が多く行われてきている。Clark and Oswald(1994)は、British Household Panel Survey(BHPS)のデータを用いた実証分析を行い、失業者は生活満足度が引き下げられていることを発見している。Winkelmann and Winkelmann(1998)は、GSOEP(German Socio-Economic Panel)のパネルデータを使用して、失業経験が生活満足度に与える影響を推定した結果、固定効果の影響を考慮しても、失業により人々の生活満足度が低下していることを発見している。Clark(2006)では、GSOEP, BHPS, European Community Household Panel(ECHP)といったパネルデータを使用して、人々のウェルビーイングは、期間の長短に関わらず失業によって大きく損なわれることを確認している。この他、Helliwell(2003), Helliwell and Putnam(2004), Hudson(2006), Kuroki(2011), Pedersen and Schmidt(2011)でも、失業や収入の低下が人々のウェルビーイングを低下させる効果があることを発見している。

近年、ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)が主観的ウェルビーイングに与える影響に関する実証分析が広く行われるようになってきている。ソーシャル・キャピタルとは、「個人間のつながりや社会的ネットワーク、およびそこから生じる互恵性と信頼性の規範^{注5}」(Putnam, 2000)であるとされる^{注6}。Szreter and Woolcock(2004)によれば、ソーシャル・キャピタルは結びつきの種類によって、結束型(Bonding)、橋渡し型(Bridging)、連結型(Linking)の三種に分類されるという^{注7}。主観的ウェルビーイング研究の文脈においては、このうち「橋渡し型」や「連結型」に属する一般的な他者や制度への信頼感といった要因に着目した実証研究が蓄積されてきている。Kuroki(2011)は、JGSS(Japanese General Social Surveys)の調査結果を分析したところ、学歴、収入、結婚、健康といった要素が高いほど幸福であることが確認されると共に、社会的信頼と他者への信頼の両方が、人々の幸福度に対して正の影響を与えていることを発見している。Bjørnskov(2006)やHelliwell(2003)は、WVS(World Values Survey)による各国データを分析し、一般的な他者への信頼感が高い人々ほど生活満足度が高まっているという結果を得ている。Helliwell and Putnam(2004)では、WVS, USBS(US Benchmark Survey), CCS(Comparable Canadian Survey)の調査結果を分析したところ、一般的信頼感や近隣への信頼感だけでなく、警察への信頼感が高いほど、主観的なウェルビーイングが高まっていることを確認している。Hudson(2006)では、EUの各国データを使用した分析を通じて、中央銀行、EU、各国政府、法律や国連組織への信頼感が高いほど、人々の生活満足度が高まっていることを発見している。大崎(2017)は、東京都の住人を対象にしたアンケート調査の結果を分析し、所得階層が高い人々にとっては経済的安心よりも一般的信頼が生活満足度の向上において重要であることを明らかにしている。

心理学の分野では主観的ウェルビーイングを説明する上でコントロール感が有効であるとする研究が蓄積されている。Lachman and Weaver(1998)は、コントロール感とは目標に向かっていく上での個人の効力感や有効性のこと、あるいは目標を達成する上で個人の手には負えない障害があると信ずる程度のことであるとされた上で、人々の経済階層とコントロール感の関係について分析している。結果、高収入な人々は生活満足度が高い傾向にあるが、低収入の人々であってもコントロール感が高い場合は、高収入の人々と同程度の生活満足度が観察されることを発見している。

上に挙げた一連の実証研究においては、主観的ウェルビーイングとして幸福度や生活満足度をその分析対象としているが、人々の社会生活における安心感を主観的ウェルビーイングの一種として明示的に扱った分析は、高坂他(2010)や林(2011)を除いて少ない。高坂他は、兵庫県を対象に実施したアンケート調査を用いた実証分析の結果、災害時の行政への信頼感や制度への信頼感が基盤となって人々の主観的な安心感が高められている構造を明らかにしている他、人々が居住する地域の暮らしにおいて感じる安心感と日本社会において感じる安心感は正に相関するものの、その結果には乖離が生じていることも指摘している。林(2011)は同じデー

タを用いて、人々の主観的な安心感が一般的な他者や制度、災害時の行政に対する信頼感だけでなく、居住地域の経済成長率によっても高められていることを発見している。ただし、これらの研究では個人の心理的特性を表す要因は考慮されていない。

本稿では、人々の主観的な安心感について質問したアンケート調査の結果を使用して、個人の心理的特性を表すコントロール感を考慮した上で、地域社会の経済的状況やソーシャル・キャピタルがどのような影響を与えているのか分析する。次章では分析対象となるデータについて紹介する。

III. 分析データ

人々が居住する地域の暮らしにおいて感じている主観的な安心感について質問した調査は少ない。そこで本稿では、筆者らのグループが実施した「社会の安全と安心に関する意識調査」を通じて得られた個票データと、本調査の回答者が居住する地域の社会・経済的状態を表す地域統計を用いて分析を行う。以下ではデータの詳細について説明する。

1. インターネット調査の概要

1.1. 調査方法

本分析で使用する個票データは、2018年11月に調査会社を通じてインターネット調査を行い収集した。調査対象は兵庫県に在住している20歳から69歳までの1,000人で、男女比は各500人である。回答者の居住地域や年齢に偏りがでないよう、神戸市から500人、神戸市以外の兵庫県下の市町から500人の回答を収集することとした。年齢階層は、20代、30代、40代、50代、60代の各年齢階層における男女の回答数がそれぞれ50人ずつとなるよう調査を設計した。ただし、2017年の兵庫県における就業構造基本調査の結果と比較すると、本調査では相対的に高学歴の回答者が多い^{註8}。このため、本分析の結果の解釈においては、サンプリングに起因するバイアスが存在する可能性に留意する必要がある^{註9}。

1.2. 調査票の設計

調査票では様々な「社会の安全と安心に関する意識」について聞いている(表1)。以下では、調査票の中から本分析で使用する質問項目について取り上げ、その内容について概観する。

第一に、人々が居住する地域において感じている暮らしの安心感について聞いている。ここでは、日々の生活とそれを支える地域社会の環境を念頭に回答できるよう、「あなたのお住まいの地域は、安全で安心して暮らせると感じますか。」(以下、安心感)という質問を設けた。回答の選択肢は「1. 安心して暮らせない」から「10. 安心して暮らせる」にかけての10段階とした。なお、本質問項目については高坂他(2010)で用いた調査票を参照した。

第二に、コントロール感に関する質問を行っている。ここでは問いとして、「何をするにしても私は十分な心の準備ができる。」(以下、「私は心の準備ができる」)、「私は、本当にしたいと願うことならば、たいていそれをうまくやれる。」(以下、「私は本当にしたいと願えば実行できる」)、「ほしいものを手に入れられるかどうかは、私自身の手にゆだねられている。」(以下、「ほしいものが手に入るかは自分次第」)、「将来私の身に起きることはまったく私次第だ。」(以下、「将来のことはまったく自分次第」といった類似の設問を設けている。回答の選択肢は「1. まったくそう思わない」から「7. 強くそう思う」にかけての7段階とした。質問項目は、Lachman and Weaver(1998)を参照して作成した。

第三に、ソーシャル・キャピタルに関する質問を行っている。本稿では人々が居住する地域において感じてい

る暮らしの安心感を分析対象としていることから、ソーシャル・キャピタルについても、回答者が居住している地域の人々や自治体を対象とした質問項目を設けることにした。そこで、Szreter and Woolcock(2004)にならい、結束型 (Bonding)、橋渡し型 (Bridging)、連結型 (Linking) の三分類に分けて、ソーシャル・キャピタルに関する質問項目を盛り込んだ。結束型のソーシャル・キャピタルについては、「あなたは現在お住まいの地域で、近所づきあいをどの程度していますか。」(以下、「近所付き合い」という質問を設けた。回答の選択肢は「1. 親しく付き合っている」から「4. つきあいはない」にかけての4段階とした。橋渡し型のソーシャル・キャピタルでは、「住んでいる地域では、ほとんどの人は基本的に正直である。」(以下、「住民は正直である」)、「住んでいる地域では、ほとんどの人は信頼できる。」(以下、「住民は信頼できる」)、「住んでいる地域では、ほとんどの人は基本的に善良で親切である。」(以下、住民は善良で親切である)という質問に対して、「1. そう思わない」から「5. そう思う」にかけての5段階で評価を聞いている。連結型のソーシャル・キャピタルでは、県と市町村の自治体を取り上げ、「県(市町)は、おおむね住民に対して誠実である。」(以下、「県(市町)は誠実である」)、「県(市町村)は住民の立場を尊重している。」(以下、「県(市町)は住民の立場を尊重している」)、「県(市町村)が住民に発信する情報は信頼できる。」(以下、「県(市町)の情報発信は信頼できる」といった行政に対する信頼感について質問している。評価については「1. そう思わない」から「5. そう思う」にかけての5段階で聞いている。

最後に、回答者個人の客観的な属性に関する質問を設けている。ここでは、性別、年齢、居住地の郵便番号、婚姻の有無、子供の有無、個人の昨年度の収入(実数)、学歴、雇用形態について質問している。なお、推定に用いる際に、個人の収入については対数化を行った。その際、個人の収入がゼロであるサンプルは対数化ができないため、そうしたサンプルには値に0.01を加えた上で対数化を行った。

次節では、推定に用いる地域社会の経済的状況を表す地域統計について概観する。

表1 「社会の安全と安心に関する意識」に対する質問項目

概念	質問内容	質問項目	回答の選択肢
主観的ウェルビーイング	「あなたのお住まいの地域は、安全で安心して暮らせると感じますか。」		「1. 安心して暮らせない」から「10. 安心して暮らせる」
	「何をやるにしても私は十分な心の準備ができる。」		
	「私は、本当にしたいと願うことならば、たいいていそれをうまくやれる。」		
	「ほしいものを手に入れられるかどうかは、私自身の手にゆだねられている。」		「1. まったくそう思わない」から「7. 強くそう思う」
コントロール感	「将来私の身に起きることはまったく私次第だ。」		
ソーシャル・キャピタル (結束型)	「あなたは現在お住まいの地域で、近所づきあいをどの程度していますか。」		「1. 親しくつきあっている」 「2. つきあいはあるが、親しくはない」 「3. あまりつきあっていない」 「4. つきあいはない」
	「住んでいる地域では、ほとんどの人は基本的に正直である。」		
	「住んでいる地域では、ほとんどの人は信頼できる。」		
	「住んでいる地域では、ほとんどの人は基本的に善良で親切である。」		
ソーシャル・キャピタル (縮減型)	「県は、おおむね住民に対して誠実である。」		「1. そう思わない」 「2. どちらかといえそそう思わない」 「3. どちらともいえない」 「4. どちらかといえそそう思う」 「5. そう思う」
	「県は住民の立場を尊重している。」		
	「県が住民に発信する情報は信頼できる。」		
	「市町は、おおむね住民に対して誠実である。」		
	「市町は住民の立場を尊重している。」		
ソーシャル・キャピタル (連結型)	「市町が住民に発信する情報は信頼できる。」		

2. 地域社会の経済的状況

人々が居住する地域の暮らしにおいて感じている安心感と回答者が居住する地域の経済・社会的状況との関連性を分析するにあたって、市町レベルの経済統計を用いることにした。これはインターネット調査の実施対象が兵庫県の在住者に限定されていることもあるが、より詳細な地域間の経済・社会的状況の違いを考慮した分析が可能になるからでもある。本分析では、先行研究にならって、市町別の経済成長率（名目）を推定に用いることにする。なお、市町別の成長率は年度毎に変動が大きいので、ここでは地域の平均的な経済動向を見るために、2011年度から本稿の執筆時点での最新のデータである2015年度にかけての5年間の平均経済成長率を用いることにする。さらに、各市町の所得水準を表す一人あたり市内総生産（名目）も導入する。これら市内総生産のデータは兵庫県の市町民経済計算を参照した。加えて、先行研究において取り上げられてきた失業率も採用する。市町別の失業率のデータは2015年度の国勢調査を参照した。

3. 記述統計

推定に用いるデータの記述統計は表2の通りである。推定に用いるサンプルサイズは、精度の低い回答者を検知するために用意したトラップ質問¹⁰に回答した者31人を除く969人である。記述統計表に記載されている「一般的信頼感（主成分）」「県への信頼感（主成分）」「市町への信頼感（主成分）」「コントロール感（主成分）」は、抽出された主成分のデータを表している。ソーシャル・キャピタル（橋渡し型）、ソーシャル・キャピタル（連結型）、コントロール感に関わる質問については、類似の質問が複数用意されている。類似の質問群の結果を用いて主成分分析を行い、固有値が1を超える主成分を抽出し、推定式に加えることにした。コントロール感については二つの主成分が抽出され、他の変数については1つの主成分が抽出された。いずれの変数群における第一主成分も主成分負荷量は正であった。

IV. 推定モデルと分析結果

1. 推定モデル

本分析では、第一に、以下の式（1）に基づいて重回帰分析を行う。

$$Anshin_i = f(scap_i, region_i, cont_i, controls_i) \quad (1)$$

被説明変数には回答者*i*の「安心感」($Anshin_i$)を採用する。重要な説明変数としては、第一に、ソーシャル・キャピタル変数 ($scap_i$) を導入する。 $scap_i$ には、ソーシャル・キャピタルの3つの類型に合わせて、結合型を表す変数として「近隣の付き合い」、橋渡し型を表す変数として「他者への信頼感（主成分）」、連結型として「県への信頼感（主成分）」「市町への信頼感（主成分）」を導入する。回答者が一連のソーシャル・キャピタル変数が豊かであると考えているならば、「安心感」は高まると考えられる。従って、これら変数の係数は正となることが予想される。第二に、回答者が居住する市町における社会・経済的要因を表す変数 ($region_i$) を採用する。「安心感」に対して「失業率」は負の影響を持ち、「平均経済成長率（名目）」「一人あたり総生産（名目）」は正の影響を持つと予想される。第三に、コントロール感変数 ($cont_i$) を用いる。コントロール感が高いほど、回答者の「安心感」は高まると予想され、係数は正であることが期待される。第四に、 $controls_i$ には、個人の属性を示す変数である年齢、性別、結婚や子供の有無を表すダミー変数と、回答者の経済的状況に関する変数として、昨年度の年収の対数値と、学歴や雇用形態を表すダミー変数を採用する。なお、幸福度に関する一連の実証研究の結果によれば、年齢と幸福度の間には非線形の関係があることが指摘されている。そこで、本分析では、年齢の2乗項や年齢階級ダミーを導入した分析も行う。

表2 記述統計

変数名	平均値	標準偏差	最小値	最大値
安心感	6.540	1.812	1	10
近隣の付き合い	2.804	0.987	1	4
住民は正直である	3.131	0.897	1	5
住民は信頼できる	2.955	0.965	1	5
住民は善良で親切である	3.333	0.926	1	5
他者への信頼感 (主成分)	0.000	1.558	-3.998	3.466
県は誠実である	2.889	0.881	1	5
県は住民の立場を尊重している	2.869	0.860	1	5
県の情報発信は信頼できる	3.040	0.903	1	5
県への信頼感 (主成分)	0.000	1.611	-3.792	4.070
市町は誠実である	2.951	0.921	1	5
市町は住民の立場を尊重している	2.903	0.918	1	5
市町の情報発信は信頼できる	3.084	0.904	1	5
市町への信頼感 (主成分)	0.000	1.626	-3.750	3.830
私は心の準備ができる	3.783	1.352	1	7
私は本当にしたいと願えば実行できる	4.057	1.334	1	7
ほしいものが手に入るかは自分次第	4.676	1.298	1	7
将来のことはまったく自分次第	4.365	1.276	1	7
コントロール感 (主成分)	0.000	1.390	-4.890	4.224
コントロール感 (第二主成分)	0.000	1.002	-3.205	4.088
失業率 (%)	4.829	0.913	2.588	7.515
平均経済成長率 (名目, %)	1.015	0.017	0.959	1.116
一人あたり市内総生産 (名目, 2015年度, 百万円)	3.926	2.652	1.848	14.309
男性ダミー	0.484	0.500	0	1
年齢	45.063	13.919	20	69
年齢の2乗項	2224.196	1265.224	400	4761
20代ダミー	0.189	0.392	0	1
30代ダミー	0.204	0.403	0	1
40代ダミー	0.199	0.400	0	1
50代ダミー	0.206	0.405	0	1
60代ダミー	0.201	0.401	0	1
結婚ダミー	0.569	0.496	0	1
子供ダミー	0.481	0.500	0	1
収入 (対数値)	3.094	4.352	-4.605	8.243
中卒ダミー	0.021	0.142	0	1
高卒ダミー	0.271	0.445	0	1
短大卒・専修学校卒ダミー	0.196	0.397	0	1
大卒ダミー	0.426	0.495	0	1
大学院卒ダミー	0.060	0.237	0	1
現役短大・専修学校ダミー	0.004	0.064	0	1
現役大学生ダミー	0.017	0.127	0	1
現役大学院生ダミー	0.005	0.072	0	1
自営業主ダミー	0.035	0.184	0	1
自由業者ダミー	0.029	0.168	0	1
家族従業者ダミー	0.018	0.131	0	1
在宅就労・内職ダミー	0.013	0.115	0	1
常勤の職員 (役職なし) ダミー	0.225	0.418	0	1
常勤の職員 (役職あり) ダミー	0.101	0.302	0	1
常勤の職員 (経営者) ダミー	0.007	0.085	0	1
契約社員ダミー	0.047	0.213	0	1
アルバイト・パートタイマーダミー	0.149	0.356	0	1
派遣社員ダミー	0.021	0.142	0	1
嘱託ダミー	0.010	0.101	0	1
委託労働・請負ダミー	0.010	0.101	0	1
求職中ダミー	0.042	0.201	0	1
通学・家事手伝いダミー	0.174	0.380	0	1
休職中ダミー	0.118	0.322	0	1

ここで、 $Anshin_i$ と $scap_i$ の因果関係について検討しておきたい。Kuroki(2011)は、一般的信頼が原因となつて主観的ウェルビーイングである幸福感に正の影響を与えていることを確認している。本稿ではこれに基づき、 $Anshin_i$ を被説明変数として扱うことにする。

(1)の推定モデルでは、被説明変数である $Anshin_i$ が連続変数であることを仮定している。そこで、同様の変数を用いて以下の(2)のモデルに基づき順序プロビット分析による推定も行う。この手法では、 $Anshin_i$ の10段階の評価が等間隔ではなく、順序のあるカテゴリであるとして推定する。各変数の係数については限界効果を元に評価する。

$$Prob(Anshin_i) = g(scap_i, region_i, cont_i, controls_i) \quad (2)$$

2. 分析結果

人々の安心感に関する一連の推定結果は表3、4の通りである。表3の結果を見ると、推定結果(1)では、回答者個人の属性を表す変数のみを用いて推定している。重回帰分析を行った結果、男性ダミー、年齢、結婚ダミー、大卒ダミー、大学院卒ダミー、現役大学生ダミー、現役大学院生ダミーの係数が有意水準1%で有意、高卒ダミーの係数が有意水準5%で有意、短大卒・専修学校卒ダミーの係数が有意水準10%で有意であった。ただし、各雇用形態ダミーや収入の対数値の係数は有意ではなかった。結果、男性は女性よりも安心感が低いこと、高年齢層や結婚している人の方がより安心感が高い傾向が確認された。学歴については、中卒の者に比べて、高卒、短大卒、大卒、大学院卒、現役大学生、現役大学院生の者の安心感が高いことも確認された。なお、各学歴ダミーの係数は高卒が0.886、大卒が1.275、大学院卒が1.487、現役大学生が2.155、現役大学院生が3.71と、高学歴ほど係数が大きく安心感が高くなっている様子がうかがえる。

推定結果(3)の順序プロビット分析による推定結果を見ると、係数の有意性については(1)における重回帰分析の結果と概ね一致した。限界効果の推定結果について一部を紹介すると、女性は男性に対して、また既婚者は未婚者に比して、安心感の値が10である確率がそれぞれ1.6%高まることが確認された。年齢が1歳増す毎に安心感が10である確率が0.1%上昇することも分かった。大学卒、大学院卒、現役大学生、現役大学院生であれば、中卒に比して、安心感の値が10である確率はそれぞれ5.5%、11.4%、22.3%、62.3%高まることも分かった。

推定結果(2)では、(1)で使用した説明変数に加えて、回答者が居住する地域の経済・社会的要因を表す失業率、平均経済成長率、一人あたり市内総生産を用いて重回帰分析を行っている。推定の結果、失業率の係数は有意水準1%で負に有意であり、事前の予測と整合的な結果が得られた。居住地域の失業率が高いほど安心感が低下している様子が確認された。ただし、平均経済成長率や一人あたり市内総生産の係数は有意ではなかった。なお、(1)で有意であった説明変数の係数は、(2)においてもほとんど同様に有意であった。

推定結果(4)では、(2)で用いた説明変数を採用して順序プロビット分析を行った結果が掲載されている。結果、失業率の係数はここでも有意水準1%で負に有意であった。他の係数の有意性については(2)における重回帰分析の結果と同様であったが、ここではさらに家族従業者ダミーと求職中ダミーが共に有意水準5%で負に有意であった。限界効果について一部抜粋すると、失業率が1%ポイント上昇することで、安心感の値を10と回答する確率は0.9%低下することが確認された。他にも、女性は男性に比して、また既婚者は未婚者に比して安心感の値を10と回答する確率が1.5%上昇することが分かった。年齢が1歳増す毎に安心感の値が10である確率が0.1%上昇することも分かった。大卒、大学院卒、現役大学生、現役大学院生であれば、中卒に比して、安心感の値が10である確率がそれぞれ5.4%、11.3%、22.3%、62.0%高まることが確認された。家族従業者や求職中の者は、常勤の職員(役職なし)の者に比して、安心感の値が10である確率がそれぞれ1.6%、1.4%低下することも分かった。

表3 主観的な安心感の推定結果(1)

	OLS		Ordered Probit			
	(1)	(2)	(3)	限界効果 Anshin="10"	(4)	限界効果 Anshin="10"
地域社会の経済的状況 失業率		-0.230 *** (0.067)			-0.137 *** (0.039)	-0.009 *** (0.003)
平均経済成長率(名目)		-2.473 (3.752)			-1.559 (2.198)	-0.099 (0.140)
一人あたり市内総生産(名目)		-0.024 (0.023)			-0.012 (0.013)	-0.001 (0.001)
コントロール変数 男性ダミー	-0.410 *** (0.139)	-0.410 *** (0.139)	-0.240 ** (0.081)	-0.016 *** (0.006)	-0.241 *** (0.082)	-0.015 *** (0.006)
年齢	0.014 *** (0.005)	0.014 *** (0.005)	0.009 *** (0.003)	0.001 *** (0.000)	0.009 *** (0.003)	0.001 *** (0.000)
結婚ダミー	0.477 *** (0.151)	0.453 *** (0.150)	0.247 *** (0.088)	0.016 *** (0.006)	0.236 ** (0.088)	0.015 ** (0.006)
子供ダミー	0.008 (0.155)	-0.015 (0.155)	0.016 (0.090)	0.001 (0.006)	0.003 (0.091)	0.000 (0.006)
収入(対数値)	-0.008 (0.019)	-0.008 (0.019)	-0.006 (0.011)	-0.000 (0.001)	-0.006 (0.011)	-0.000 (0.001)
高卒ダミー	0.886 ** (0.410)	0.875 ** (0.407)	0.492 ** (0.238)	0.040 ** (0.024)	0.489 ** (0.238)	0.039 (0.024)
短大卒・専修学校卒ダミー	0.721 * (0.418)	0.689* (0.416)	0.408 * (0.243)	0.034 (0.025)	0.394 (0.243)	0.032 (0.025)
大卒ダミー	1.275 *** (0.407)	1.255 *** (0.405)	0.732 *** (0.237)	0.055 ** (0.022)	0.727 *** (0.237)	0.054 ** (0.022)
大学院卒ダミー	1.487 *** (0.461)	1.483 *** (0.458)	0.874 *** (0.268)	0.114 ** (0.058)	0.877 *** (0.269)	0.113 ** (0.057)
現役短大・専修学校ダミー	1.494 (0.965)	1.518 (0.959)	0.773 (0.561)	0.099 (0.117)	0.799 (0.562)	0.104 (0.120)
現役大学生ダミー	2.155 *** (0.606)	2.146 *** (0.603)	1.254 *** (0.355)	0.223 ** (0.112)	1.262 *** (0.356)	0.223 ** (0.112)
現役大学院生ダミー	3.710 *** (0.886)	3.678 *** (0.883)	2.305 *** (0.527)	0.623 *** (0.194)	2.306 *** (0.529)	0.620 *** (0.195)
自営業主ダミー	0.217 (0.326)	0.206 (0.324)	0.130 (0.190)	0.009 (0.015)	0.126 (0.190)	0.009 (0.015)
自由業者ダミー	-0.266 (0.355)	-0.211 (0.353)	-0.163 (0.207)	-0.009 (0.010)	-0.133 (0.207)	-0.007 (0.010)
家族従業者ダミー	-0.711 (0.445)	-0.653 (0.444)	-0.371 (0.260)	-0.017 ** (0.008)	-0.340 (0.260)	-0.016 * (0.009)
在宅就労・内職ダミー	0.234 (0.507)	0.103 (0.505)	0.196 (0.296)	0.015 (0.027)	0.122 (0.297)	0.009 (0.024)
常勤の職員(役職あり)ダミー	0.119 (0.222)	0.105 (0.221)	0.042 (0.129)	0.003 (0.009)	0.034 (0.130)	0.002 (0.009)
常勤の職員(経営者)ダミー	0.369 (0.676)	0.443 (0.674)	0.200 (0.394)	0.016 (0.036)	0.240 (0.395)	0.019 (0.039)
契約社員ダミー	-0.019 (0.287)	-0.017 (0.285)	-0.012 (0.167)	-0.001 (0.011)	-0.012 (0.167)	-0.001 (0.010)
アルバイト・パートタイマーダミー	-0.060 (0.202)	-0.058 (0.201)	-0.046 (0.117)	-0.003 (0.007)	-0.044 (0.118)	-0.003 (0.007)
派遣社員ダミー	0.337 (0.414)	0.352 (0.413)	0.178 (0.241)	0.014 (0.021)	0.190 (0.242)	0.014 (0.022)
嘱託ダミー	-0.125 (0.575)	-0.150 (0.573)	-0.073 (0.334)	-0.004 (0.019)	-0.085 (0.335)	-0.005 (0.018)
委託労働・請負ダミー	-0.179 (0.572)	-0.256 (0.569)	-0.164 (0.333)	-0.009 (0.016)	-0.210 (0.333)	-0.011 (0.014)
求職中ダミー	-0.535 (0.333)	-0.503 (0.332)	-0.308 (0.195)	-0.015 ** (0.008)	-0.290 (0.195)	-0.014 * (0.008)
通学・家事手伝いダミー	0.180 (0.249)	0.176 (0.248)	0.130 (0.145)	0.009 (0.011)	0.128 (0.146)	0.009 (0.011)
休職中ダミー	-0.318 (0.237)	-0.319 (0.236)	-0.155 (0.138)	-0.009 (0.007)	-0.156 (0.138)	-0.009 (0.007)
Adjusted R2	0.093	0.107				
LR chi2			92.74		107.62	

※1 *** : 有意水準1%で有意, ** : 有意水準5%で有意, * : 有意水準10%で有意。

※2 学歴ダミーからは中卒ダミー, 雇用形態ダミーからは常勤の職員(役職なし)ダミーを推定から除外している。

表4には、ソーシャル・キャピタルやコントロール感に関する変数を用いた推定結果を掲載している。重回帰分析を行った結果について見てみると、推定結果(1)ではソーシャル・キャピタル変数のうち、結束型を表す「近隣の付き合い」の係数は有意水準10%でも有意とはならなかったが、橋渡し型を表す「一般的信頼感(主成分)」の係数は有意水準1%で正に有意であった。一般的な他者への信頼感が安心感を高めている様子が確認された。さらに、連結型を表す「県への信頼感(主成分)」の係数は有意水準1%で正に有意であったが、「市町への信頼感(主成分)」の係数は有意水準10%でも有意ではなかった。居住地域の自治体の中でも、安心感の確保の上では県に対する信頼感が重要であるとの結果が得られた。経済・社会的要因については、失業率の係数が有意水準1%で負に有意であった。属性変数は、男性ダミーの係数が有意水準5%で負に有意、結婚ダミーの係数が有意水準1%で正に有意であった。年齢、子供ダミー、収入の係数は有意水準10%でも有意ではなかった。さらに、学歴ダミーについては、高卒ダミーの係数が有意水準10%で正に有意、現役大学生ダミーの係数が有意水準5%で正に有意、大卒、大学院卒、現役大学院生ダミーの係数がいずれも有意水準1%で正に有意であった。雇用形態ダミーの係数の結果は省略しているが、いずれも有意な結果が得られなかった。

推定結果(2)では、コントロール感に関する変数を導入して推定を行った結果を掲載している。「コントロール感(主成分)」の係数は有意水準1%で正に有意であり、事前の予測と整合的な結果が得られた。コントロール感の高まりが安心感を高めている様子が確認された。なお、失業率、男性ダミー、結婚ダミー、学歴ダミーの係数については推定結果(1)とほぼ同様に有意であったが、ここでは年齢の係数が有意水準1%で正に有意であった。平均経済成長率、一人あたり市内総生産、子供ダミー、収入、雇用形態ダミーの係数は有意ではなかった。なお、コントロール感に関する項目については主成分分析により2つの主成分が抽出されたが、第二主成分はいずれの推定でも有意とはならなかったため、本分析ではこれを省いた推定結果を掲載している。

推定結果(3)では、ソーシャル・キャピタル、コントロール感、地域社会の経済的状況に関する変数および属性変数を全て導入した推定を行った。結果、「一般的信頼感(主成分)」、「県への信頼感(主成分)」、「コントロール感(主成分)」の係数はいずれも有意水準1%で有意であった。一般的信頼や行政への信頼が人々の安心感を高めていることが確認されると共に、コントロール感が高いほど安心感が高まっている様子がうかがえる。また、失業率はここでも有意水準1%で負に有意であり、失業率が高い地域では人々の主観的な安心感が損なわれていることが明らかになった。平均経済成長率、一人あたり市内総生産の係数は有意ではなかった。属性については、男性ダミーおよび高卒ダミーの係数が有意水準10%で負に有意、大卒ダミー、現役大学生ダミーの係数が有意水準5%で正に有意、結婚ダミー、大学院卒ダミー、現役大学院生ダミーの係数はいずれも有意水準1%で正に有意であった。年齢、子供ダミー、収入、高卒ダミー、短大卒・専修学校卒ダミー、現役短大・専修学校ダミー、各雇用形態ダミーの係数は有意ではなかった。

安心感と年齢の間に非線形の関係があるかもしれない。そこで推定結果(4)では、(3)に採用した説明変数に年齢の2乗項を加えて推定を行った。これまでの幸福研究から中年層の幸福度が低い結果が示されている。もし、安心感においても同様の傾向が認められるのであれば、年齢の係数が負に有意、年齢の2乗項の係数が正に有意であることが想定される。分析の結果、係数の方向性は事前の予想と整合的な結果となったものの、年齢、および年齢の2乗項のいずれも有意水準10%でも有意とはならなかった。なお、ソーシャル・キャピタル変数、コントロール感変数、地域社会の経済的状況変数を見ると、分析結果(3)と同様の変数における係数が有意な結果となっており、係数の大きさもほぼ同じ水準となっている。コントロール変数も(3)と同様に有意であったが、雇用形態ダミーのうち、求職中ダミー、休職ダミーの係数は有意水準10%で負に有意となった。

さらに安心感と年齢の関係について分析するために、推定結果(5)では年齢の代わりに年齢階級ダミーを導入して推定を行った。分析に先立って年齢階級別に安心感の平均値を比較したところ、他の世代に比して30

代の水準が低かった。そこで、20代、40代、50代、60代ダミーを導入して推定を行うことにした。分析の結果、60代ダミーの係数が有意水準5%で正に有意であったが、20代ダミー、40代ダミー、50代ダミーの係数はいずれも有意水準10%でも有意ではなかった。30代に比して60代の高齢世代の安心感が有意に高いことが確認された。一連の幸福研究と同様に、高齢者の主観的な安心感が他の世代に比して高い傾向にあることがうかがえる。なお、2018年の調査時点における30代の回答者の中には、90年代後半から2000年代前半、また2008年のリーマンショック後に生じた就職氷河期と呼ばれる時期に労働市場に参入した者が含まれると考えられる。こうした就職氷河期世代は、学卒後も長く収入の低下や不安定な雇用を経験してきたことで安心感が低くなっている可能性がある^{註11}。この他、ソーシャル・キャピタル変数、コントロール感変数、地域社会の経済的状況変数およびコントロール変数の係数については、分析結果(3)で有意であった変数がここでも同様に有意な結果となった。表に記載はないが、雇用形態ダミーについては求職中ダミーの係数のみが有意水準10%で負に有意であった。常勤の職員(役職なし)に比して、求職中の者の安心感が低い様子が確認された。

推定結果(6)、(7)には、それぞれ推定式(3)、(5)で用いた説明変数を基に順序プロビット分析を行った結果が掲載されている。推定結果を見ると、各変数の係数の有意性については重回帰分析と順序プロビット分析の間で差は見られなかった。さらに、限界効果については、(6)と(7)の結果を比較したところ大きな差が見られなかった。推定結果(7)の限界効果は附表1に掲載している。推定結果(7)から一部の結果を紹介すると、「一般的信頼感(主成分)」「県への信頼感(主成分)」「コントロール感(主成分)」が1単位増加することで、安心感の値を10と回答する確率はそれぞれ0.7%、0.6%、0.7%上昇することが確認された。また、失業率が1%ポイント上昇することで、安心感の値を10と回答する確率は0.5%低下することが確認された。さらに、コントロール変数を見ると、安心感の値を10と回答する確率は、男性は0.7%低下し、60代の回答者は30代に比して1.3%上昇し、既婚者は未婚者に比して1%上昇することがわかった。加えて、大卒、大学院卒、現役大学院生は、それぞれ安心感の値を10と回答する確率が3.2%、8.9%、39.7%上昇することも確認できた。附表に記載はないが、求職中の回答者は常勤の職員(役職なし)に比べて安心感を10と回答する確率が1%低下することも分かった。

表4 主観的な安心感の推定結果(2)

	OLS				Ordered Probit		
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
ソーシャル・キャピタル 近隣の付き合い	-0.063 (0.063)		-0.025 (0.062)	-0.019 (0.062)	-0.022 (0.062)	-0.008 (0.041)	-0.006 (0.041)
一般的信頼感(主成分)	0.256 *** (0.043)		0.224 *** (0.042)	0.226 *** (0.042)	0.227 *** (0.042)	0.151 *** (0.028)	0.152 *** (0.028)
県への信頼感(主成分)	0.233 *** (0.068)		0.224 *** (0.067)	0.223 *** (0.067)	0.227 *** (0.067)	0.145 *** (0.044)	0.146 *** (0.044)
市町への信頼感(主成分)	0.032 (0.067)		0.041 (0.066)	0.040 (0.066)	0.035 (0.066)	0.023 (0.043)	0.020 (0.043)
コントロール感 コントロール感(主成分)		0.298 *** (0.040)	0.218 *** (0.038)	0.216 *** (0.038)	0.214 *** (0.038)	0.155 *** (0.025)	0.153 *** (0.025)
地域社会の経済的状況 失業率	-0.164 *** (0.062)	-0.248 *** (0.065)	-0.186 *** (0.061)	-0.183 *** (0.061)	-0.180 *** (0.061)	-0.127 *** (0.040)	-0.124 *** (0.040)
平均経済成長率(名目)	0.349 (3.479)	-2.325 (3.649)	-0.073 (3.423)	0.078 (3.422)	0.255 (3.427)	-0.244 (2.235)	-0.064 (2.238)
一人あたり市内総生産(名目)	-0.002 (0.021)	-0.027 (0.022)	-0.007 (0.021)	-0.007 (0.021)	-0.006 (0.021)	-0.003 (0.014)	-0.002 (0.014)
コントロール変数 男性ダミー	-0.267 ** (0.128)	-0.363 *** (0.135)	-0.246 * (0.126)	-0.250 ** (0.126)	-0.237 * (0.126)	-0.163 ** (0.082)	-0.157 * (0.082)
年齢	0.007 (0.005)	0.013 *** (0.005)	0.007 (0.004)	-0.038 (0.029)		0.005 (0.003)	
年齢の2乗項				0.000 (0.000)			
20代ダミー					0.251 (0.173)		0.134 (0.113)
40代ダミー					0.201 (0.163)		0.141 (0.106)
50代ダミー					0.192 (0.162)		0.109 (0.106)
60代ダミー					0.386 ** (0.175)		0.249 ** (0.115)
結婚ダミー	0.439 *** (0.138)	0.402 *** (0.146)	0.403 *** (0.136)	0.419 *** (0.136)	0.407 *** (0.136)	0.233 *** (0.089)	0.235 *** (0.089)
子供ダミー	-0.178 (0.144)	-0.040 (0.150)	-0.166 (0.142)	-0.179 (0.142)	-0.139 (0.143)	-0.095 (0.093)	-0.076 (0.094)
収入(対数値)	-0.012 (0.017)	-0.021 (0.018)	-0.022 (0.017)	-0.025 (0.017)	-0.024 (0.017)	-0.017 (0.011)	-0.018 (0.011)
高卒ダミー	0.715 * (0.374)	0.76 * (0.396)	0.638 * (0.368)	0.668 * (0.368)	0.707 * (0.370)	0.387 (0.239)	0.426 * (0.241)
短大卒・専修学校卒ダミー	0.449 (0.383)	0.633 (0.405)	0.421 (0.376)	0.467 (0.377)	0.486 (0.378)	0.262 (0.245)	0.297 (0.246)
大卒ダミー	0.983 *** (0.372)	1.152 *** (0.394)	0.924 ** (0.366)	0.961 *** (0.367)	0.990 *** (0.368)	0.593 ** (0.238)	0.630 *** (0.239)
大学院卒ダミー	1.283 *** (0.421)	1.496 *** (0.446)	1.311 *** (0.415)	1.370 *** (0.416)	1.383 *** (0.417)	0.866 *** (0.270)	0.903 *** (0.272)
現役短大・専修学校ダミー	0.947 (0.880)	1.229 (0.934)	0.789 (0.866)	0.720 (0.867)	0.696 (0.867)	0.419 (0.565)	0.367 (0.566)
現役大学生ダミー	1.37 ** (0.556)	1.92 *** (0.587)	1.282 ** (0.547)	1.162 ** (0.552)	1.167 ** (0.546)	0.842 ** (0.360)	0.774 ** (0.359)
現役大学院生ダミー	2.913 *** (0.814)	3.477 *** (0.859)	2.819 *** (0.801)	2.733 *** (0.802)	2.703 *** (0.802)	1.966 *** (0.531)	1.900 *** (0.532)
雇用形態ダミー	YES	YES	YES	YES	YES	YES	YES
Adjusted R2	0.254	0.157	0.279	0.254			
LR chi2						311.02	313.51

※1 *** : 有意水準 10% で有意, ** : 有意水準 5% で有意, * : 有意水準 10% で有意。

※2 学歴ダミーからは中卒ダミー, 雇用形態ダミーからは常勤の職員(役職なし)ダミー, 年齢階級ダミーからは30代ダミーを推定から除外している。

※3 雇用形態ダミーの欄にある"YES"は, 各雇用形態ダミー変数を用いて推定していることを表している。

V. 結論

本稿では、兵庫県を対象に行なったアンケート調査の結果に基づき、人々が居住する地域において感じている暮らしの安心感が、(1) 個人の心理的な特性を表すコントロール感、(2) 地域の経済的状況や、(3) ソーシャル・キャピタルといった経済・社会的要因に規定されているのか実証分析を行った。

分析の結果、ソーシャル・キャピタルのうち橋渡し型を表す一般的信頼感、連結型を表す県への信頼感、コントロール感といった要因が人々の主観的な安心感を高めている様子が確認された。他方、失業率は一貫して安心感を有意に引き下げていることも明らかになった。結束型のソーシャル・キャピタルを表す近隣との付き合い、平均経済成長率、一人あたり市内総生産は安心感に影響を与えている事実は確認できなかった。回答者個人の属性について言えば、女性や既婚者に加え、高学歴の者は安心感が高い傾向が認められた。子供の有無、収入が安心感に影響を与えている様子は確認されなかった。雇用形態については、常勤の職員に比して求職中の者は安心感が低いことが確認された。年齢について言えば30代に比して60代の安心感が高いことが分かった。一連の幸福度研究と同様に高齢者の安心感が高い様子がうかがえると共に、就職氷河期世代が含まれる30代の安心感が低いことが確認された。

本研究から、人々の安心感を確保するためには、失業率の低下を図りつつ、橋渡し型や連結型の社会関係資本を蓄積することが有効であることが示された。さらに、人々の教育水準を引き上げることも効果的であることが分かった。なお、こうした結果は、個人の心理的な特性であるコントロール感を考慮した上で得られたものである。

今後の課題については、以下の点が挙げられる。第一に、今後は人々の主観的な安心感について質問したパネルデータを用いた分析が求められる。本分析はクロスセクションのデータに基づいて行われたが、個人の観察できない能力や資質といった要因については十分に考慮することができなかった。今後、経年調査を行うことでパネルデータを作成して分析を行うことが重要となる。第二に、制度の質についても分析する必要がある。本研究では国内の比較分析を行っているが、本来は自治体ごとに住民の政治参加の度合いや行政の質が異なるため、そうした差を考慮できるような変数を作成する必要がある。第三に、詳細な小地域統計に基づいた分析が重要となる。本研究では市町単位の経済的状況を用いて分析を行ったが、地域社会の実態を反映した分析を行うには町丁目レベルの経済的状況に関する情報が望ましい。ただ、利用可能な小地域統計は限られていることから、そうした分析を行う際には分析の精度とデータの利用可能性とのトレードオフについて考える必要がある。第四に、日本社会において感じる人々の安心感を対象とした分析が必要となる。本分析では、人々が居住する地域において感じている暮らしの安心感を分析対象とした。ただ、高坂他(2010)で指摘されているように、地域社会における暮らしの安心感と日本社会において感じる安心感の間には乖離がある可能性がある。また、日本社会において感じる主観的な安心感は、地域の経済・社会的要因よりも、社会保障や外交・防衛といった国家制度とより強く関連しているかもしれない。上記の点については今後の研究課題としたい。

謝辞

本研究は「2018年度関西国際大学学長特別研究費」の支援を受けています。ここに記して厚くお礼申し上げます。

【注】

注1 山岸(1998)は信頼が安心と区別されるとした上で、社会的不確実性が存在する場合は人に委ねる信頼が必要になるとしている。

- 注² ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 (2008) では社会の安全と安心の組み合わせについて以下のように述べている。「人々が安全で、かつ安心して暮らせるという状態は、社会において最善である。人々が安全ではあるが、安心していない状態は、「説得」による安心の確保が課題となる。人々が安全ではないが、安心していはる状態は、最も問題のある状況であるかもしれないが、「啓蒙」による不安の喚起と「事態改善」による安全の確保が課題となる。人々が安全でもなく、安心もしていない状態は、主客の一致が見られるとはいへ根本的対策を要する最悪の状況である。」(p. 8)
- 注³ 安全安心な社会の定義は WHO における健康の定義にならっているという。「健康とは、身体的、精神的、社会的に完全に満たされている状態であり、単に病気や不健康がないだけではない。」(原文: "Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.") (出典: "What is the WHO definition of health?" WHO の website より)
- 注⁴ 心理学における幸福研究のレビューについては Uchida and Oishi (2016) が詳しい。
- 注⁵ 原文は以下の通り。"the connections among individuals' social networks and the norms of reciprocity and trustworthiness that arise from them." (Putnam, 2000, p. 19)
- 注⁶ 松川・立木(2011)は、Putnam が言う社会関係資本とは、「都市での公共の平穏・・・をおもに維持している・・・複雑でほとんど無意識のネットワーク」(ジェイコブス, 2010, p. 47) のことであるとしているが、興味深い指摘である。
- 注⁷ 結束型のソーシャル・キャピタルとは、同質的な集団の内部の結びつきを指し、家族や友人、隣人、町内会や自治会といった集団内の絆や信頼がそれに当たる。橋渡し型のソーシャル・キャピタルは、異質な人間や集団同士の緩やかで横断的な結びつきを指す。幅広い人々を含む、一般的な他者への信頼がこれに当たる。連結型のソーシャル・キャピタルとは、権力や社会的地位の異なる人間や組織間の社会的階層を超えた結びつきを表す。一例を挙げれば、市民と政治や行政との結びつきの強さを指すとと言える。
- 注⁸ 本調査のサンプルでは未婚率が高い点も注意が必要である。2015 年の国勢調査によると、兵庫県の 20 歳から 69 歳までの人口に占める有配偶者比率は約 62.5%、未婚者・死別者・離別者数の比率は約 35.5%、婚姻関係が不明な者の比率は約 2.6%であった。本調査のサンプルにおける結婚率は約 56.9%、未婚率は約 43.1%となっており、国勢調査の結果と比べると未婚率が高い水準となっている。ただし、国勢調査では未婚者と離別・死別の区別を設けているが、本調査では離別・死別の区別は設けていないため、未婚者と回答者の中に離別者・死別者が含まれていると考えられる。分析結果の解釈においては、こうした点に留意する必要がある。
- 注⁹ 2017 年度の就業構造基本調査の結果によれば、例えば、兵庫県の 60 歳から 69 歳の人口に占める中卒、高卒、専門学校・短大・高専卒、大卒、大学院卒の比率は、それぞれ約 13.7%、約 45.2%、約 15.7%、約 22.6%、約 1.6%となっている。これに対して本調査のサンプルにおける同様の比率は、それぞれ約 1%、約 31.8%、約 22.1%、約 42.6%、約 3.6%となっており、相対的に高学歴の回答者が多い傾向がある。同様の傾向は 20 代、30 代、40 代、50 代における比較においても確認された。
- 注¹⁰ 調査票の中に、しばしば「この問いは『どちらかといえばそう思わない』を選んでください」という質問を挿入している。指定した選択肢を回答していない回答者は質問項目を吟味せずに回答している可能性があるため、推定から除外することとした。
- 注¹¹ 太田他 (2007) は、労働力調査や労働力調査特別調査の個票を用いた分析により、学卒直後の失業率が高い世代は、その後も非正規雇用や無業の確率が高く、年収も低いことを発見している。堀 (2019) は就業構造基本調査の二次分析に基づき、就職氷河期世代で初職が正社員でなかった場合、その後、無業状態あるいは正社員でない割合が高くなっていることを指摘し、学卒後の労働市場の状況が中年期にまで影響を与えているとしている。

【参考文献】

- 大崎裕子「ソーシャル・キャピタルは主観的ウェル・ビーイングにおける経済的豊かさの限界を補完するか：満足と信頼の分析」『理論と方法』 32(1), 35-48 頁, 2017
- 太田聡一, 玄田有史, 近藤絢子「溶けない氷河——世代効果の展望」『日本労働研究雑誌』 No. 569, 4-15 頁, 2007
- 高坂健次, 阿部潔, 草郷孝好, 渋谷和久, 林敏彦, 与謝野有紀, 石田祐, 林万平「安全安心の意識を支える社会的信頼システムのあり方」『公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構研究年報』 第14・15巻, 1-20 頁, 2010
- ジェイン・ジェイコブズ『アメリカ大都市の死と生』山形浩生訳, 鹿島出版会, 2010
- 瀧本善之, 城仁士「「安全」と「安心」に関する一考察」『神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要』 10(1), 69-75 頁, 2016
- 中谷内一也『リスクのモノサシ—安全・安心生活はありうるか』 日本放送出版協会, 2006
- 中谷内一也『安全。でも, 安心できない・・・-信頼をめぐる心理学』 ちくま新書, 2008
- 林万平「安全安心感と経済不安」『兵庫自治学』 vol.17, 17-21 頁, 2011
- ひょうご震災記念21世紀研究機構『安全・安心の意識を支える社会的信頼システムの在り方に関する調査研究報告書』 2008
- ひょうご震災記念21世紀研究機構『ひょうごの安全安心推進戦略—マップ手法の活用に関する調査研究報告書』 2009
- 堀有喜衣「「就職氷河期世代」の現在——移行研究からの検討」『日本労働研究雑誌』 No. 706, 17-27 頁, 2019
- 松川杏寧, 立木茂雄「ソーシャルキャピタルの視点から見た地域の安全・安心に関する実証的研究」『地域安全学会論文集』 14(0), 27-36 頁, 2011
- 山岸俊男『信頼の構造：こころと社会の進化ゲーム』 東京大学出版会, 1998
- Bjørnskov, C. “The multiple facets of social capital” *European journal of political economy*, Vol.22, 22-40, 2006
- Clark, Andrew E. “A note on unhappiness and unemployment duration” *IZA discussion paper*, No.2406, 2006
- Clark, Andrew E. and Andrew J. Oswald “Unhappiness and unemployment” *The economic journal*, 104, 648-659, 1994
- Frey, Bruno S. and A. Stutzer *Happiness & Economics: How the Economy and Institutions Affect Human Well-Being*, Princeton University Press, 2002
- Helliwell, John F. “How’s life? Combining individual and national variables to explain subjective well-being” *Economic Modelling*, 20, 331-360, 2003
- Helliwell, John F. “Well-being and social capital: Does suicide pose a puzzle?” *NBER working paper series*, Working Paper No.10896, 2004
- Helliwell, John F. and Robert D. Putnam “The social context of well-being” *Philosophical Transactions of the Royal Society*, 359, 1435-1446, 2004
- Hudson, J. “Institutional trust and subjective well-being across the EU” *Kyklos*, Vol.59, No.1,

43-62, 2006

- Kuroki, M. “Does Social Trust increase Individual Happiness in Japan?” *Japanese Economic Review*, Vol. 62, No. 4, 444-459, 2011
- Lachman, M. E. and S. L. Weaver “The Sense of Control as a Moderator of Social Class Differences in Health and Well-Being” *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 74, No. 3, 763-773, 1998
- Pedersen, P. J. and T. D. Schmidt “Happiness in Europe: cross-country differences in the determinants of satisfaction with main activity” *The Journal of Socio-Economics*, 40, 480-489, 2011
- Putnam, R. *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster paperbacks, 2000
- Szreter, S. and M. Woolcock “Health by Association? Social Capital, Social Theory, and the Political Economy of Public Health” *International Journal of Epidemiology*, 33, 650-667, 2004
- Uchida, Y. and S. Oishi “The Happiness of Individuals and the Collective” *Japanese Psychological Research*, 58(1), 125-141, 2016
- Winkelmann, L. and R. Winkelmann “Why are the unemployed so unhappy? Evidence from panel data” *Economica*, Vol. 65, No. 257, 1-15, 1998

附表1 主観的な安心感の推定における限界効果

	Anshin="1"	Anshin="2"	Anshin="3"	Anshin="4"	Anshin="5"	Anshin="6"	Anshin="7"	Anshin="8"	Anshin="9"	Anshin="10"
ソーシャル・キャピタル 近隣の付き合い	0.000 (0.001)	0.000 (0.001)	0.000 (0.003)	0.000 (0.004)	0.001 (0.006)	0.001 (0.004)	-0.000 (0.004)	-0.001 (0.009)	-0.001 (0.009)	-0.000 (0.004)
一般的信頼感 (主成分)	-0.002 (0.001)	-0.003 (0.001)	-0.007 (0.002)	-0.011 (0.002)	-0.022 (0.004)	-0.016 (0.003)	0.008 (0.002)	0.032 (0.006)	0.013 (0.003)	0.007 (0.002)
県への信頼感 (主成分)	-0.002 (0.001)	-0.003 (0.001)	-0.006 (0.002)	-0.01 (0.002)	-0.021 (0.003)	-0.015 (0.005)	0.008 (0.003)	0.031 (0.009)	0.013 (0.004)	0.006 (0.002)
市町への信頼感 (主成分)	-0.000 (0.001)	-0.000 (0.001)	-0.001 (0.002)	-0.001 (0.003)	-0.003 (0.006)	-0.002 (0.005)	0.001 (0.002)	0.004 (0.009)	0.002 (0.004)	0.001 (0.002)
コントロール感 (主成分)	-0.002 (0.001)	-0.003 (0.002)	-0.007 (0.004)	-0.011 (0.003)	-0.022 (0.006)	-0.016 (0.005)	0.008 (0.002)	0.032 (0.009)	0.014 (0.004)	0.007 (0.002)
地域社会の経済的状况	0.002 (0.001)	0.002 (0.001)	0.005 (0.002)	0.009 (0.003)	0.018 (0.006)	0.013 (0.004)	-0.007 (0.002)	-0.026 (0.009)	-0.011 (0.004)	-0.005 (0.002)
平均経済成長率 (名目)	0.001 (0.034)	0.001 (0.038)	0.003 (0.097)	0.004 (0.156)	0.009 (0.323)	0.007 (0.236)	-0.003 (0.118)	-0.013 (0.470)	-0.006 (0.199)	-0.003 (0.097)
一人あたり市外出生産 (名目)	0.000 (0.000)	0.000 (0.001)	0.000 (0.001)	0.000 (0.001)	0.000 (0.002)	0.000 (0.001)	-0.000 (0.001)	-0.000 (0.003)	-0.000 (0.001)	-0.000 (0.001)
コントロール変数	0.002 (0.001)	0.003 (0.002)	0.007 (0.004)	0.011 (0.006)	0.023 (0.009)	0.016 (0.005)	-0.008 (0.005)	-0.033 (0.017)	-0.014 (0.007)	-0.007 (0.004)
20代ダミー	-0.002 (0.001)	-0.002 (0.002)	-0.005 (0.004)	-0.009 (0.007)	-0.019 (0.013)	-0.015 (0.004)	0.006 (0.004)	0.028 (0.024)	0.012 (0.011)	0.006 (0.006)
40代ダミー	-0.002 (0.001)	-0.002 (0.002)	-0.006 (0.004)	-0.009 (0.007)	-0.016 (0.013)	-0.016 (0.004)	0.006 (0.004)	0.029 (0.022)	0.013 (0.010)	0.007 (0.006)
50代ダミー	-0.002 (0.001)	-0.002 (0.002)	-0.004 (0.004)	-0.007 (0.007)	-0.016 (0.012)	-0.012 (0.005)	0.005 (0.004)	0.023 (0.022)	0.010 (0.010)	0.005 (0.005)
60代ダミー	-0.003 (0.002)	-0.004 (0.004)	-0.010 (0.007)	-0.016 (0.011)	-0.035 (0.015)	-0.029 (0.013)	0.008 (0.003)	0.052 (0.023)	0.024 (0.012)	0.013 (0.007)
結婚ダミー	-0.004 (0.002)	-0.004 (0.004)	-0.010 (0.007)	-0.017 (0.011)	-0.034 (0.015)	-0.024 (0.003)	0.013 (0.003)	0.049 (0.019)	0.021 (0.008)	0.010 (0.004)
子供ダミー	0.001 (0.001)	0.001 (0.002)	0.003 (0.004)	0.005 (0.007)	0.011 (0.014)	0.008 (0.010)	-0.004 (0.005)	-0.016 (0.020)	-0.007 (0.008)	-0.003 (0.004)
収入 (対数値)	0.000 (0.000)	0.000 (0.000)	0.001 (0.001)	0.001 (0.002)	0.003 (0.002)	0.002 (0.001)	-0.001 (0.001)	-0.004 (0.002)	-0.002 (0.001)	-0.001 (0.000)
高卒ダミー	-0.005 (0.003)	-0.006 (0.008)	-0.016 (0.014)	-0.027 (0.014)	-0.059 (0.032)	-0.051 (0.031)	0.012 (0.004)	0.087 (0.047)	0.042 (0.026)	0.023 (0.016)
短大卒・専修学校卒ダミー	-0.004 (0.003)	-0.004 (0.008)	-0.011 (0.008)	-0.019 (0.014)	-0.042 (0.033)	-0.035 (0.030)	0.009 (0.004)	0.061 (0.049)	0.029 (0.027)	0.016 (0.016)
大卒ダミー	-0.009 (0.004)	-0.010 (0.005)	-0.026 (0.016)	-0.042 (0.032)	-0.088 (0.026)	-0.068 (0.025)	0.127 (0.008)	0.059 (0.046)	0.032 (0.024)	0.032 (0.015)
大学院卒ダミー	-0.006 (0.002)	-0.008 (0.005)	-0.021 (0.009)	-0.039 (0.022)	-0.104 (0.039)	-0.126 (0.035)	-0.041 (0.035)	0.144 (0.022)	0.111 (0.040)	0.089 (0.048)
現役短大・専修学校ダミー	-0.004 (0.003)	-0.004 (0.005)	-0.012 (0.013)	-0.021 (0.025)	-0.050 (0.069)	-0.048 (0.084)	0.002 (0.024)	0.073 (0.102)	0.040 (0.071)	0.023 (0.050)
現役大学生ダミー	-0.005 (0.002)	-0.007 (0.005)	-0.019 (0.013)	-0.035 (0.025)	-0.091 (0.069)	-0.109 (0.084)	-0.031 (0.024)	0.129 (0.102)	0.095 (0.071)	0.072 (0.050)
現役大学院生ダミー	-0.005 (0.002)	-0.007 (0.005)	-0.022 (0.010)	-0.044 (0.030)	-0.132 (0.053)	-0.215 (0.045)	-0.197 (0.033)	0.033 (0.053)	0.193 (0.053)	0.397 (0.058)
雇用形態ダミー	YES (0.002)	YES (0.002)	YES (0.004)	YES (0.006)	YES (0.012)	YES (0.025)	YES (0.061)	YES (0.108)	YES (0.027)	YES (0.206)